

---

# **(元) 將軍閣下の日常**

久遠 夜。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

（元）将軍閣下の日常

### 【Nコード】

N2002U

### 【作者名】

久遠 夜。

### 【あらすじ】

（元）将軍閣下の異種族子育ての奮闘と部下との熱い絆、魔王陛下への忠誠心が綴られていく日常の物語り、のハズ…。

## 登場人物紹介（またの名を作者覚え書き）（前書き）

見なくてもいいような登場人物紹介です。触れないかもしれないことまで書いてあります。

## 登場人物紹介（またの名を作者覚え書き）

レヴアリティカルテ・ファン・ブルームハルト

性別：男性

年齢：見た目30歳代後半・実年齢500歳くらい（魔族的に中年くらい）

職業：南方を預かる赤軍將軍（出戻り）

二つ名：煉獄の將軍

家族：ラス（養子予定）・実姉（領主）

種族：獸人（狼）人間にも数時間変化可能（黒わんこ型は省エネ）

瞳：青銀（人型時：紺）

毛並み：漆黑（人型時：漆黑）

性格：勤勉実直、冷静沈着だったハズ（現在、仕事以外ただの親馬鹿）

ラス・フォン・ブルームハルト

性別：少年

年齢：5歳

家族：レヴアリティカルテ（父親）・両親共に死亡

種族：人間

瞳：深緑色

髪：栗色

性格：純粹無垢、父上大好きっ子

魔王陛下

性別：男性

年齢：見た目20歳代前半・実年齢115歳（若造）

職業：魔王（25代目）

家族：アリア（養い子）・両親共に死亡

種族：吸血鬼（母親）と人間（父親）の混血

二つ名：黒衣の弑逆王（最近は呼ばれなくなった）

瞳：深紅

髪：漆黒

容姿：吸血鬼特有の美男子だが、潜在能力値が異常に高いため、同族以上の美貌をもつ

性格：楽しいこと好きで、遊び回っているが国務はしっかりやっている。

アリア・ヴァイスミューラー

性別：少女

年齢：7歳

家族：魔王陛下（保護者）・両親共に死亡

種族：人間

瞳：碧眼

髪：白金

容姿：美少女

性格：過去の出来事のため人間に対して恐怖感を感じている。

アジエット・ルイスト

性別：女性

年齢：見た目20歳代後半・実年齢250歳くらい

職業：赤軍副將軍

種族：魔族

瞳：白銀

髪：白銀

容姿：白薔薇のような美女

性格：副官として非常に有能だが、超犬好き。

トウリー・バルム

性別：男性

年齢：不詳

職業：白軍將軍

種族：魔族（植物系）

瞳：黄緑色

髪：明るい緑色

容姿：顔立ち普通だが、一度目になると何故か頭から離れない。

性格：おちゃらけたマッドサイエンティストらしい。治癒系魔法のスペシャリスト。

ライナス・ベクター

性別：男性

年齢：見た目10歳代後半、実年齢93歳

職業：白軍副將軍

種族：魔族

瞳：灰色

髪：白色

容姿：無表情の美男子

性格：面倒事大嫌い。直属の上司は放置。

シェーラ・リフ・バルツァー

性別：女性

年齢：見た目20歳代後半・実年齢不詳（誰も聞けないし、言わな

い)

職業：青軍將軍

種族：魔族（実は淫魔）

瞳：黄金色（瞳孔縦割れ）

髪：巻き毛・黄金色

容姿：美女・ナイスバディ

性格：男嫌い、可愛い綺麗な女性が大好き。

アベル・モルゲンシュテルン

カイン・モルゲンシュテルン

性別：少年

年齢：見た目15、16歳、実年齢52歳

職業：黒軍將軍

種族：魔族（色々混合）

瞳：深緑色

髪：焦げ茶色

容姿：ちよつと整った可愛い感じ

性格：アベル・優しく、ぽやんとしているが、カインより精神年齢高め

カイン：少々やんちゃだが、寂しがり屋。

**登場人物紹介（またの名を作者覚え書き）（後書き）**

魔王陛下の名前はわざと伏せてます。



## 留守番の注意点

“ 先ず扉を開けるとときには、絶対相手を確認しろ。”  
子どもの初めての留守番のような注意事項が、今後の私の最大の教訓となった。

家の扉を開けた次の瞬間の、我が君の驚いた表情とそれに次いだ大爆笑を私は生涯忘れることは出来ないだろう。

そして、取り敢えずこの場を誤魔化したくてとった行動を私は一生悔いる事になる。  
直ぐに。

『……………わ、ワン…』

「あー、一生分笑った気がするぜ。てか、わ、ワンって」

大爆笑の後も笑いは尾を引いているようだ。けれど、その吸血鬼に特有の美貌は全く損なわれることはない。闇を思わせる漆黒の髪と血のような深紅の瞳がその存在感を強めていた。

「あの畏怖の的“煉獄の將軍”レヴァリティカルテが黒のわんこって…っ部下が見たら見物だなあ」

粗末な木のテーブルをバシバシ叩きながら、至高の御方は笑い転げていた。

私は人であれば滝のような汗をかいていたことだろう。

本来の私の姿は鋭い牙をもつ狼の頭をした獣人であり、鍛えた肉体は鋼のようだと部下たちに尊敬の目で見られたものだ。一度戦場にできれば、將軍位を賜わった者として恥じない武勲を挙げてきたつ

もりである。

しかし、今の私の姿といたら漆黒の毛並みをもつ中型犬の姿をとっているのだから我が君とて笑いたくもなるだろう。

かつての部下たちには決して見せられない有り様だ。

「ふっさふさだなあ。ちよつと撫でていいか？」

満面の笑みと溢れる好奇心できかれ、流石に躊躇する。

『そ、それはちよつと……。出来れば、御前に拝謁するに相応しい姿に戻りたく存じます』

この姿のままでは余りに礼を欠いている。

私の目の前におわすのは、全ての魔を統べる魔王陛下なのだから。本来ならば、榮譽ある將軍位を私事で辞した者がお側に近寄ることも憚られるところである。

「え。俺はそのままですら全然構わないぞ。可愛いじゃんか」

『戻らせて下さい。お願いですから』

我が君の言葉に脱力感を覚えた。

この方は、本当に変わらない…。

本来の姿に戻った私は、落ち着かないから座れと言われ同じ席についている。

「あの、失礼かとは存じますが、何故こちらに？」

「ちよつと急に、お前が職を辞したいって言った理由が気になってきて。まっ、暇潰し。」

心臓に悪い暇潰しは止めて欲しいと痛切に思う。あれから、5年はたっているのだが。

「で、お前の“理由”何してるわけ？」

職を辞したいと申し出た際、私は肅正を覚悟した。御身ずから任命して頂いた將軍位を返上するのだから当たり前前の覚悟だ。だが、理由を何も聞かれず我が君はそれをお許し下さった。

しかし、我が君はやはりご存知なのだ。

「今は午睡をとっております。暫く起きてはまいりません」

「ふーん。そんで？何でまた引き取ることになったんだ、人間の子どもなんて」

「いえそれが…、馬車の事故に偶々居合わせまして、そこで瀕死の母親からあの子を頼まれたのです。一見して魔族だと分かる私の容姿を恐れず、我が子を託す母親の思いに打たれました。それに…笑ったんですよ。初めて目があつた時、私を見てあの子は…」

あの時のことを思い出すと自然と笑みがこぼれる。

初めて手にする柔らかく温かなぬくもり、少しでも力加減を間違えれば容易く壊れてしまう小さな命。

無垢な笑顔を向けられたとき、私はこの幼子を守り育てようと心に誓った。

「成る程。將軍閣下つてば立派にたらされちゃったわけだ」

ニヤニヤというのがぴつたり笑みを浮かべ、とんでもないことを口にされる。

「た、たらされたなどっ！…ただ、愛しく感じてしまったのです」

「それが、たらされたって言うんだよ。まあ、俺も人のこと言えねえけどな」

この方には珍しい自嘲に満ちた笑み。それにどのような意味が込められているのか、私には図りかねた。

「それはどのような意味ですか？」

「俺も1人拾ったんだよ。超絶美少女」

「奥方をお迎えになったのですか！？」

驚き過ぎて、もう少しでテーブルを破壊してしまうところだった。「ちげえよ。アリア、7歳だぜ？お前と同じようなもんだ。ちよつと前まで人間の方、暗愚が玉座についてただろ？そんときの馬鹿がやらかした阿呆な命令で滅んだ領地の生き残りを拾ったんだよ。んで、今に至る」

俺、犯罪者になるじゃんとか笑ってはいらっしゃるが、私は話をされている際に一瞬だけ放たれた殺気に気付き、肝を冷やした。

やはり、この方は格が違い過ぎる。

生まれながらにして強大な魔力を得て、王たる資質を備えた圧倒的なご存在。

魔族と人間との混血である事実が未だに信じられない。だが、この力の前ではそんな事実でこの御身が軽んじられる道理もない。

「でな？実はここで本題なんだが、お前戻ってくる気ないか？俺んところ」

「は？」

予想もしていなかった一言に思考は一瞬真っ白になる。

「だからさあ、あれから南の將軍位つてば空位のまんまなんだよね」

テーブルに頬杖をつきながら、しれつと重大事項を口にされる。

「そんな馬鹿な……。私の後任には副将であつたアジエットを据えることになつていたはずですよ」

「そのアジエットが、やっぱり將軍はお前しか務まらないつて言つて將軍代理をやつてるぞー。部下全員の総意でな」

「そのような勝手を致しているのですか！？陛下の勅命を無視して！？なんと言つことをっ！」

本来ならば、陛下が勅命によつて下された將軍位を拒否するなど許されないことだ。即座に処断されてもおかしくない重罪である。

それを我が君は不問に処しておられるというのか。

「まあ、歸つてやれ。部下にそこまで思われてるんだ、上司冥利につきるだろう？だが、これは強制じゃあない。俺は一度お前の申し出を承諾してるしな」

「しかし、私は將軍位の返上を願い出、軍を離れた身にございます。今更再び將軍位に収まるなど……」

余りに勝手が過ぎる。それに、私にはあの子がいるのだ。魔族の地に連れていくのも、離れることもしたくない。

「頭の固い奴だな。俺がiiiって言つてるんだ。他に誰の承諾が必

要だとしても？」

それはそうだ、この方以上の許しなど存在しない。

「あと、子どもと離れたくないんだろうし、お前の子どもなら王宮で預かるぜ？アリアにも友達が出来て万々歳ってな。それに、もうそろそろ潮時だろう？お前が人型をとれるのはどれくらいの時間だ？精々が数時間に過ぎんだろう。まだ、人は魔族に寛容ではない。魔族と知られば、ここには居れんぞ」

それは、この5年の間危惧していたことだった。私の容姿は魔族そのもの、知られば恐怖を与え厭われるのは必定だ。

「子どもを何処かに預けるのも一つの手だぜ？伝もあるしな」

離れたくはない。しかし、魔族などと一緒にいない方があの子のためではないか？

様々な考えが浮かんで頭の中が飽和状態になりそうだ。

「こういう時はあれだな。もう1人の当事者に決めて貰おう」

我が君が指を鳴らされると、寢室の扉が開く。そこには、瞳に涙を一杯に貯めた愛し子が立っていた。

「ラス！？」

全く起きた気配がなかった。軍を離れて久しいとはいえ、將軍を務めていたのだ気配に気付かぬはずがない。

「俺がちよっと細工した。やっぱり、当人の意見って大切じゃん？」

立ち聞きの補助をしてたのか…。気付かないはずだ。

「今までの話しだいたい分かったか？」

こくこくと一生懸命に頷き、理解していることを伝えてくる。

「パパと離れて別の奴んとこいくか？それとも、パパの故郷に一緒に来るか？それとも、このまま限られた時間を過ごすか？どうする、ラス坊や。だが、聞いていた通り“このまま”を選んだとしても、そう長くはもたん。安全は保証するがパパの“故郷”は、人の住む土地とは全く違うところだ」

子どもにも容赦のない説明だ。だが、真実でもある。

というか、パパってなんですか…。

「僕、レヴィとずっと一緒にいたい！！一緒に行く！」

真っ直ぐな瞳で、精一杯気持ちを伝えようとするラスに私の迷いは消えた。

今にも泣き出しそうなラスを抱き締めてやる。

なんて不甲斐ない保護者だろう。

「ラス、一緒にいよう。不安にさせてすまなかった」

一気に安心したのか、すっかり私にしがみつき大声で泣き出した。  
「よしっ！一件落着だな。じゃっ、俺帰るし。準備出来たらこのピーちゃんで知らせろよ。転移門開くし」

我が君の右腕の上に、黄金の炎を纏う大きな鳥が現出した。翼をゆつくりとたたみ、我が君の腕に乗る姿は非常に優美だった。

「ぴ、ピーちゃん？」

だからこそ、この華麗な生き物に無茶苦茶似合わない名前だ。

「本当の名前もあるんだけどさ、アリアがピーちゃんって呼ぶもんだから気に入っちゃったみたいなんだよ、本人が。だから、愛称ピーちゃん」

本人まで認めているのか…。

「謹んでお預かり致します」

「じゃあ、またなあ」

ひらひらと手を振り、転移門を開き我が君は帰っていかれた。  
嵐のような一時だった。

数日後、私たちは転移門で魔族の地へと移り住むことになる。  
部下たちには、号泣された。

## あいさつの仕方（前書き）

威厳が何処にもない將軍閣下となっております。

## あいさつの仕方

我が君は退屈がお嫌いだ。そのために、いろいろな手段で暇潰しを行われてきた。

今一番その被害に会っているのは、私かもしれない。

王宮での暮らしが始まり、私は將軍位に再び収まった。こうして私を呼び戻し、再び臣下としてくださった魔王陛下の御為に身命を賭してお仕えする所存である。

現在は人の王と我が君が誓約を結ばれたため、人間との間で戦争が起こる可能性は低いだろう。しかし、何時なるとき軍の力が必要となるか分からない。平時である今こそ鍛練を怠らず、万全の体制を整えておくべきだ。

その点、我が南方を預かる赤軍せきぐんの部下たちは、実に勤勉であると感じている。自主的な鍛練を怠らず、出戻りの私の命令にも忠実に厳しい訓練にもよく堪えている。軍務の日々は、充実している。だが、私のプライベートは日々嵐が巻き起こっていた。他ならぬ魔王陛下によって…。

我が君は、王宮の一角を私の新しい住居として自由に使って構わないと住まわして下さっている。

公私は分けなければならないが、実際何時でもラスに会える距離にしているのは大変助かる。

それに、ラスは陛下の養い子であらせられるアリア様と直ぐに打ち解けて仲良くしており非常に楽しそうだ。私もとても嬉しい。

しかし、しかした。どうして陛下は私で暇潰しを実行されるのだろう…。



「レヴァリテイカルテ、ちょっと犬になってくれ」

我が君に呼ばれ御前に赴くと、突然そう言われた。

「へ、陛下？」

「やっぱり、どーしても撫で回したい、洗いたい、ブラッシングしたい」

「いえ、ですからそれは…ご勘弁をと以前申し上げました」

「えー、いいじゃねえか、減るもんでもなし」

減ります！絶対いろいろなものが減ります！！部下からの信頼とか魔族としての矜持とか保護者としての威厳とかがつー！

「アリアも楽しみにしてるんだぜ。黒わんこに会えるの。子どもが悲しんでも、お前の心は痛まんのか。そうか、そうかあ」

心底残念そうな表情を作り、情に訴えかけてくる。

絶対に九割方ご自分のためだ。しかし、これ以上主命に逆らうなど…。それに、アリア様をすっかりさせてしまうのも心苦しい。

「陛下…。一度だけでしたら犬の形をとります。しかし、他の者にご内密にお願い申し上げます」

私は、負けた。

「ありがとなあ」

それは満面の笑顔で礼を言われ、選択を間違ってしまったのではないかと後悔が押し寄せてきた。

その後、黒わんこと化した私は、言葉通り陛下に撫で回され、洗われ、ブラッシングされた。それはもう念入りに。

「また、次も宜しくなっ。俺、礼は言っただけど“一度だけ”には同意してないし」

灰に、なりかけた。

その後も続く嫌がらせのような諸々に、精神的な疲労が蓄積していった。

アリア様と一緒に受けている授業が終わり、家に帰ってきたラスがとことと近くにやって来る。

「ねえレヴィ、少し屈んで？」

「どうした？」

獣人である私の背丈はかなりある。幼い子どもと視線を合わせようとすれば、必然的にかなり屈まないとならない。

何時ものように深く屈むと、頬に温かな感触を一瞬感じた。

「レヴィ、ただいま」

いつもと同じ無垢な笑顔で帰宅の挨拶をしてくる。だが、一ついつもと違うところがあった。

「ラ、ラスどうしたのだ？」

「あのね、アリアと陛下がしてたんだ。聞いたら陛下が教えてくれたよ。大好きな人同士のあいさつなんだよって。頬つぺたとかおでこにするんだって」

その表情は教えられたことをすっかり出来て、誇らしげだ。

「あの方は……」

間違っではない。いないのだが、何処まで説明を受けたかが重要な気がする。

知らず知らず、重いため息を吐き出した。

「レヴィ……。いやだった？ 僕のこと、好きじゃない？」

酷く悲しい顔をして聞いてくるので慌てた。勘違いさせてはいけない。

「そ、そうではない。そうではないのだが、こういうことは無闇矢鱈にやってはいけないぞ。説明し難いが、本当に仲が良くて、おはようとかお休みなさいの挨拶をする時だけにしなさい。間違っても口にしてはいけないぞ。それはまた別の意味があるからな」

「どうして、口はだめなの？」

うつ、やはりその質問に行き着くか。

「それを知るのは、大人になってからでいいんだ」

「うん、わかった」

ラスが素直ないい子で本当に良かった。  
何かどっと疲れた。

そんなやり取りを終え、夕食を食し、風呂に一緒に入った。  
床に就く際、もう一度頬に口付けを受ける。

「お休みなさい」

今度は、私も挨拶を返してやった。嬉しそうに笑い布団を深く被る。

「お休み、いい夢を」

こうしてみると、親愛を伝え合う行為も良いものだと感じた。

後日、陛下には注意を促した。従うだけが臣下ではないのだから。

## あいさつの仕方（後書き）

彼は、子ども最大の疑問にぶち当たった時どうする気でしょう。  
ここの鳥の話しとか出すのかもしれませんがね。

## 投票の公平性は折り紙付き

剣と剣とが激しくぶつかり合い、斬撃の音が鍛錬場に響き渡る。一瞬でも気を緩めれば、容赦のない攻撃が急所目掛けて繰り出されることになるだろう。

この場を支配する緊張感が、一撃毎に高まってゆくのを全員が肌で感じていた。

しかし、この模擬戦の軍配がどちらに上がるのかは誰の目からも明らかだった。

数撃の後、相手の刃を弾き返した際に作った一瞬の隙を、彼――“煉獄の將軍”の二つ名をもつ赤軍將軍レヴァリティカルテは見逃さなかった。鍛え上げた鋼の肉体を最大限に活かした、拳による一撃を部下の鳩尾に叩き込む。相手の身体が数メートル先に吹き飛ぶ。相手は何とか受け身をとれはしたが、地面に倒れこみ起き上がる事が出来なかった。

その喉元に、わざと刃を漬してある模擬刀が突き付けられ勝敗は決する。

レヴァリティカルテの圧勝である。

「いい太刀筋であった。狙いも悪くない。だが、少々筋力が足りぬな。基礎訓練に励め」

將軍の指導の言葉で、周りの者の緊張は幾分薄れる。

そんな中で、一番安全な距離で試合を観戦していたラスの深緑色の瞳は興奮で輝いていた。

「レヴィ、格好いい!!」

その言葉に、漆黒の毛並みに覆われた凜々しい耳が片方反応する。毛に覆われていて顔色は分からないが、艶やかな漆黒の尾が力一杯振られていた。

部下たちは思った。

「あの冷静沈着な閣下がめちゃくちや喜んでいる！そういえば、今日の鍛練いつもより気合いの入れようが違うような気がする…。子どもが見に来ているからか！

理由が分かり、部下たちは微笑ましい気持ちになった。こんな閣下もありかもしれない。

「鍛練中失礼致します。レヴアリティカルテ將軍閣下、至急目を通して頂きたい書類がありまして、執務室にお戻り下さいますか」  
鍛練場に姿を現した担当執務官がそう伝える。將軍ともなると、書類仕事もかなりの量をこなさなければいけないのだ。

「ご苦労。直ぐにゆく」

「はっ」

「すまないが、今日の私との模擬戦はまた後日とする。各自休憩後、いつもの鍛練を行ってくれ。後はアジエットに一任する」

側にいた優秀な副官にあとを託すことにする。

「承知致しました」

白銀の髪と瞳を合わせもち、高潔な薔薇を思わせる美貌の主は完璧な礼をとり將軍の命令に是を返す。

「ラス、執務室で仕事をしてくる。好きなだけ鍛練を見ていくといい。ただし、鍛練中はこの位置から先へは入っては駄目だ。いいな？」

「うんっ、お仕事頑張ってね」

優しく頭を撫でてやり、將軍閣下は鍛練場を後にした。

軍の鍛練は、暫しの休憩時間をとることになった。

「ラス様、喉は乾きませんか？冷たいお茶やジュース、お菓子や簡単な軽食もございますよ」

城に仕える女官たちが鍛練の休憩を感じ取り、飲み物や軽食を用意する。

休憩を取りながら、雑談が始まる。

「なあなあ、ラス様って閣下の養い子になるわけだろ？なら、閣下は“父親”ってことになるんじゃないか？」

「確かに。それだと、名前呼びっておかしくないか？」

「じゃあ、ラス坊やにレヴアリティカルテをパパって呼ばせようぜ」

全く気配を断ち、雑談に興じていた兵士たちの背後から魔王陛下が突如わいて出た。

「へ、陛下！いつからそこにおられたんですか！？」

「今さっき通りかかったとこ。そしたら、面白そうな話してるじゃないか 俺も混ぜろ」

「あ、はい。でも、閣下をパパと呼ばせるのはちょっと…」

「えー、反応が面白そうでよくねえか？」

暇潰し大好きの魔王陛下としては、絶対にそちらの方が楽しめると思っていた。

「では、ここにいる全員で投票して決めるというのは如何でしょうか？」

四軍一の武道派を誇る赤軍の紅一点、アジエツトが提案をした。

「いいねえ、のった」

「じゃあ、僕紙を貰ってきます」

こうして、誰も止める者もなく“第一回將軍閣下をラス様にどう呼んでもらうか投票”が幕を開けた。本人たちの意見を無視して。

「皆さん、投票は終わりましたか？こちらの投票用紙は一見ただの紙切れですが、不正が出来ないよう陛下の魔力が込められております」

第三者が聞けばそこまでのるか、と突っ込みがきそうだが、ある意味幸いそんな常識人はいなかった。

これが、天下に名を轟かす魔王陛下とそれに忠誠を誓う軍人だと知られたら魔族の恥だろう。

「では、開票していきます。えー、“お父さん”“父様”“父上”“パパ”……」

順調に開票が行われていくなか、部下たちは魔王陛下に聞こえないように声を潜めて思ったことを言い合っていた。

「絶対“パパ”って書いたの陛下だよな」

「だなあ」

「……うんうん」「……」

「さて、これで全ての開票が終わりました。

栄えある第一位は“父上”に輝きました！」

「無難なところですね」

「一番しつくりくるか」

「ちっ、面白くないぜ」

思い思いの感想が飛び交う。だが、部下たちは“パパ”じゃなくて良かったと全員一致で心の中で思った。

「では、ラス様。さっそく練習してみましようか」

「レヴィが僕のお父さん？いいのかなあ？レヴィいやじゃない？」

「そんなはずがございません。きっと、お喜びになれますよ」

「そうだぞ。レヴァリティカルテは、自分からは絶対に本当の父親だと思つて欲しいなんて言い出せないからな。お前から呼んでやる  
といい」

ラスと目を会わせ、魔王は少し乱暴に頭を撫でながら勇気を後押しする言葉を紡ぐ。

「僕もレヴィの本当の息子になりたい！」

「よし！じゃあ、あいつが帰つて来たら“父上”って呼んでやるんだぞ。ち・ち・う・え、だからな。他は却下」

そして、魔王陛下による呼び方訓練が開始されることになる。



その夜、父上と呼ばれた將軍閣下が感涙にむせび泣いたとかしいとか。

**投票の公平性は折り紙付き（後書き）**

感想など頂けると嬉しいです。

名前は大切（前書き）

かなり短い話になります。

## 名前は大切

「そっぴやお前、パパの名前ちゃんと言えるのか？」

ふと、アリアと勉強の合間の休憩をとっていたラスに、魔王陛下は優雅に紅茶を飲みながら尋ねてみた。

ここに陛下がレヴァリティカルテを“パパ”と呼ぶことに突っ込みを入れる者は存在しない。この部屋にいるのは、純粹無垢な子どもが二人と、魔王陛下の言動に慣れきって冷やかな視線を向けるだけの女官長がいるのみであるからだ。

「ちよつと前まで言えませんでした。でも、どうしても言えるようになりたくて、たくさん練習しましたっ」

少し誇らしげに、ラスは尋ねられたことに答える。

「まあ、あの名前は言いにくいよなあ。無駄に長いし、いつそのこと改名させちまうか」

レヴァリティカルテ・フォン・ブルームハルト將軍閣下は、本人の知らないところで危機に陥っていた。

というか魔王陛下、子どもの健気な努力を踏みにじろうとしている様は鬼である。

「えっ!？」

まさかそんなことになるなど想像もしていなかった彼は、驚きに目を見はる。

「レヴィの名前、私好きだよ？」

その様子に気付いたアリアが悲し気に救いの言葉を紡ぐ。

「そっか、アリアが好きなら止めとくわ」

ころつと、魔王陛下は改名を止める。擬似親馬鹿の力は偉大である。

そして、背後で特製のハリセンを準備し、そろそろ主の悪ふざけ

を諫めようとしていた女官長もハリセンを仕舞うことにした。  
こうして、本人が知らないところで改名の危機は回避された。

## 名前は大切（後書き）

魔王陛下も、本気で改名させる気はありませんでした。女官長もそれは分かっています。

魔族にとって名前はかなり重要なので、手間と魔力が非常にがかかります。

でも、やるときは本気でやる魔王陛下なので気は抜けません。

誰にでも何かある（前書き）

『あいさつの仕方』のその後という話です。

## 誰にでも何かある

もう無駄な足掻きを諦めた將軍閣下は、魔王陛下専用の一国の王に相応しい豪華な浴場にいた。

本来ならば限られた者しか使用を許されない浴場に足を踏み入れることも畏れ多いところだ。しかしまた、魔王陛下直々に使用許可が頂けるなど身に余る光栄でもある。

だが、この状況は断じて喜べない。

現在、レヴァリティカルテは黒い中型犬の姿をとらされていた。他ならぬ魔王陛下の命令によって。

艶やかな漆黒の毛並みは丁寧にブラッシングされた後、お湯に濡れべたりと身体に貼り付いてしまっている。その姿は少し貧相に映った。

――もう、どうにでもなれ。

半ば自棄くそに身体の水分会を飛ばす。

「うおっ、水飛ばすなよ。今から洗うんだからな」

無礼な行為に言葉ではそういうものの、声音は嬉々としている。

至極楽しそうな魔王陛下は、濡れても良いよう服を脱ぎ捨て上半身だけ裸の状態だ。その身体は瘦躯ではあるが、程好く筋肉がついており人外の美貌と相まって美しい。

「…お待ち下さい！陛下より今ここには誰も入れるなとご命令がっ  
…」

何やら浴場の外が騒がしい。女官が誰かと言い争っているようだ。

「陛下失礼致します！ここに閣下が居られると耳に挟んだのですが  
！？」



必死の形相でいきなり浴場に乱入してきたのは、副官であるアジエツトだった。

それに大いに焦っている、

「まさか、そこに居られるのは閣下、ですか？」

き、気付かれた。

「あ、アジエツトこれには深いわけが…」

否、何も深い意味などないが、このままでは上司としての威厳と信頼がっ！！

「キヤーー！何て愛らしいの！？いつもの閣下も大変お可愛らしくていらつしやるけれど、これはっ！陛下！！どうして私にも一声かけて下さらなかったのですか！？」

壊れた。あの“白薔薇の君”と軍内外にその名を謳われる麗人であり、非常に有能な副官が、壊れた。

「悪い悪い。今から一緒に洗うか？」

「是非とも、ご一緒させて下さい！」

それから、シャンプーはあの地方のものが刺激が少なく艶がもつとでるとか、トリートメントはどうとかかんとかマニアックな会話が始まる。

あまりの事に放心している間に両者で会話は弾み、頭の天辺から爪の先まで隅々洗われ、乾かされ、念入りにブラッシングされた。

ーもう、泣きたい。

誰にでも何かある（後書き）

アジエットにわんこ姿見られた將軍、浮気現場を見つけた人み  
いだなあ、と書いて思いました。

## 同僚との親交（前書き）

変人しかこの城にはいないのかもしれない。

## 同僚との親交

部下たちとの鍛練を終えたレヴァリティカルテは、執務室に戻るべく王宮の回廊を歩いていった。

最近では義理の息子であるラスが、自分も剣が習いたいと言い出したので、時折稽古をつけている。親である自分の背を見てその心境に至ってくれたのかと思うと、なかなか感慨深いものがある。

それに、親の欲目を差し引いても筋もよく、また頑張り屋だ。将来が楽しみである。

そんなことを考えながら歩を進めていると、正面から同じく将軍位をもつ白軍将軍トウーリ・バルムとその副官であるライナスが歩いてくる。

白軍は治癒技術に特化した特徴をもつ軍である。いつも研究室に籠り、最新の治療薬から怪しげな魔法薬まで多岐に渡って研究と開発を行っている少し、否かなり特殊な集団と認識されている。

「お久々、レヴィちゃん。前回の軍事会議ぶり？」

私を視認した奴は明るい緑色の髪を風に弾ませ、スキップをしながら近付いてきた。

「貴殿には、再三そのふざけた呼び名を改めて貰うようお願いしたはずだが？」

彼とは根本的に合わない。合わせたくない。

能力は認めるが、その性格・行動・言葉が生理的に受け付けない。いいじゃんかー。ボクと君との仲だしー」

「ただの同僚だろう」

「冷たい。あつ、そうだ。ボク、クッキーを焼いたんだ。甘い物嫌いじゃなかったよね、君。貰ってよ」

わざとらしく落ち込みを見せたかと思えば、とんでもないことを口走ってきた。

「いらん。」

即座に、拒否を示す。

「えー、何で？すつごく美味しそうに焼けたんだよ？」

「美味しそう、ということは自分では食べてないのだろう。私は、お前の実験台になるつもりはない。」

以前、書類の処理に疲れた切った頭に糖分を補給しようと奴から貰ったケーキを食べた後のことを忘れたことはない。

二度と同じ轍を踏むものか。

「輝かしい未来のために、勇気を持ってその身を差し出そうよ。きつと、素敵な明日が待ってるさっ」

「もうちょつとで昇天しかけたわ！」

変な踊りを踊りながら言われた言葉に、流石に平常心が保てない。明日も何もあつたもんじゃなかった。

「そんな時もあるって、人生にはっ」

うんうんと頷きながら、全く反省の色が見えない。獣人がいくら他より丈夫でも、ものには限度というものがある。

「ライナス、副官ならば上司の手綱をしっかり握っておけ！」

上司の少し後方で、我関せずといった態度のライナスに言う。

「え？無理でしょ。それに、面倒臭いですし。」

「最後の方が本音だろう！！」

「はい。」

私はこの副官の表情が変わるところを、終ぞ見たことがない。始終、無表情なのだ。そして、基本何事にも無関心である。

「本当にレヴィちゃんは酷いなあ。いいもん、君の息子君が受け取ってくれたからさ」

本当にとんでもないことを仕出かしてくれる。息子の命が危ない！「何だとっ！？それを早く言え！！」

私は急いでラスの気を探り、全速力で走った。

「廊下は走っちゃ駄目だぞ」

後ろの方で聞こえた声の主に、本気で殺意を覚えた。

着いたときには後の祭り。

息子は娘になっていた。

効果は数時間で消え、後遺症も無かった。

殺気を纏い、愛剣を手に奴の息の根を止めに行こうとするのを部下全員の手で阻止された。

次は、無い。

## 同僚との親交（後書き）

流石に、トゥーリも考えてやってます。

本当は、將軍閣下は部下全員でも本気出したら止められません。將軍が、折れたのです。

腐っても奴は將軍なわけなので、闘うと王宮が全壊しちゃいます。

（その前に、魔王陛下が止めるか転移させますが）

## たぶん気のせい（前書き）

作中に男性の方には、非常に不快感を感じさせてしまうかもしれない言葉が出ております。

それをご了承の上でお読み下さい。  
すみません。



## たぶん気のせい

他人の趣味嗜好はその者の勝手だとレヴァリティカルテは考える。他者に迷惑さえ掛けなければ、と前置きは必ず入るのだが。

「あら、レヴァリティカルテじゃなくて？」

魔王陛下に赤軍の定期報告を終え陛下の執務室から出てくると、レヴァリティカルテは声をかけられた。黄蜜色の豪奢な巻き毛と瞳孔が縦に割れた印象的な同色の瞳を合わせもつ女性、軍服の上からも如実に分かるその均整の取れた豊満な肢体は、同性からも羨望の的となっている。そしてなにより、彼女は生まれ持った己の美貌の魅せ方を、誰よりも良く理解していた。

「シェーラか…」

「戻っているとは聞いていたけれど本当だったのね」

心底忌々しいという態度を隠そうともしない姿勢は慣れてしまえば、ある意味天晴れとも思う時がある。

魔王陛下に対しても、基本は変わらない。只、陛下のお力とご容姿が自分より抜き出ているため、真名による忠節を誓っている。

彼女は、真性の男嫌いであるのだ。

常々、男は臭い・汚い・穢らわしいと主張して憚らない。

因みに、彼女が將軍を務める青軍は女性のみで構成されている。せいぐん

これまで会わなかったのは、將軍自ら青軍の任務に赴いていたからに他ならない。だがそうでなくとも、自分から進んで会いに来ると思えず、またレヴァリティカルテも相手が嫌がることをしたいとは思わず、会いには行かなかっただろう。

「まあ、アジエットお久しぶりね！貴方のその美しさは日々増すばかりね。こんな獣のいるむさ苦しい赤軍に身を置いていて尚、白薔薇のような気高き美貌は陰ることは無いのね。わたくしはいつも貴方が心配でならなくてよ」

自分から声をかけてきたというのに、背後にアジエットの姿を認めた瞬間、レヴァリティカルテのことは完全にどうでもよくなったようだ。

「バルツァー將軍閣下、久しぶりにお会い出来て嬉しく存じます」

「バルツァー將軍閣下だなんて堅苦しい。貴方にはシェーラと名前で呼んで欲しいわ」

今までの態度は何だったのか、とシェーラのことを知らない第三者が見れば思う程彼女の態度は違った。白磁のような頬を薔薇色に染め、柔らかな声音で話しをする姿は可憐と表現して差し支えないだろう。

「この身には過ぎたる光栄です」

そつの無い挨拶を清廉な笑顔で返している部下とこの女將軍との間に下手に介入すれば、痛い目に遭うことは長年の経験から分かっている。

「ねえ？こんな犬畜生なんて早々に身限って、わたくしの元へおいでなさいな」

犬畜生……。言われ慣れてはいるが酷い物言いだ。私たちは同じ將軍位にある同僚の筈なのだが。

「シェーラ將軍閣下、申し訳ありません。私はこの赤軍の副將としてあること、誇りに思っております。それに、レヴァリティカルテ將軍閣下に憧れて自ら赤軍に志願したのです」

シェーラの言葉に真摯な己の思いを口にする副官の姿に、熱いものが込み上げて来そうだ。

女將軍に酷い言葉を投げられているので、感動も一人である。

「閣下が剣を振るわれる時の力強く華麗な剣さばき（同時に揺れる艶やかで美しい尻尾）、そして作戦会議における的確な指示を出されるそのお姿（気を張り詰めぴーんと立った愛らしい漆黒の耳とひげ）、それら全てを敬愛（溺愛）申し上げているのです」

言われている上司としては非常にその冥利に尽きる言葉だと言うのに、何か言葉の端々に引つ掛かりを感じるのは気のせいだろうか？  
きつと、たぶん、気のせいだ。少し前に浴場で、部下の意外な姿を目にした為に過敏になっているだけだろう。

そうに違いない。

「アジエットがそこまで言うのなら、今日のところは諦めるわ。けれど！気が変わったなら何時でも言ってちょうだい。わたくしは諦めなくってよ！！」

貴方の白銀の髪と瞳には深紅も似合うけれど、青軍の瑠璃色の軍服こそ映えるはずよ、などと尚も引き抜こうと会話を続ける。

もうそろそろ、いい加減諦めて欲しい。

「その犬畜生。アジエットの美しい顔や身体を、薄汚い男の体臭やら何やらで汚してご覧なさい。そのふざけた尻尾を切り落として差上げてよ」

気高く言い切った姿は文句なしに美しいが、言われた方は堪ったものではない。

彼女は本気だ。

そして、男嫌いの女將軍は言い捨てて、魔王陛下の執務室に入っていた。今から、任務の報告らしい…。

「閣下ご安心下さい。私の命に賭けても、閣下のお美しい尻尾は死守してみせます！！」

美しく、有能で、犬好きの副官はそう言ってくれた。

本当に、悲しくなってきた。  
ラスの無垢な笑顔が恋しい…。

## たぶん気のせい（後書き）

アジエットは本当にレヴィを敬愛しています。  
他にも獣人はいるわけですし。

一人で二人、二人で一人（前書き）

最後の将軍の登場になります。

一人で二人、二人で一人

前回の軍事会議の時に、一応の挨拶を黒軍將軍と交わしたが、場所が場所だけに二人共に挨拶が出来なかった。

そのため本日の仕事を終えた後、会いに行くことにした。

息子に大好評である手作りのアップルパイを手土産にしてみる。

黒軍將軍の執務室の扉をノックする。事前に連絡を入れていたので、すんなりと部屋に通された。

「わあ、レヴィイ將軍、わざわざご足労頂いてしまつてすみませんでした」

黒軍の漆黒の軍服に着られている感の抜けない小柄な少年は、つけてけと焦げ茶色の髪を揺らしながらこちらに小走りに近付いて来て、何も無いところで転けた。

ーぼてつ。

「大丈夫か？」

見事に、顔面から着地した少年に手を伸ばし立ち上がる手助けをする。

「あたた、ありがとうございます。毎回すみません」

鼻の頭が少し赤い程度で、他は無事な様子に安堵する。

彼らこそが、黒軍將軍位を賜っていると初めから信じる者は少ない。しかし、普通ならば数十人で行われるはずの大規模攻撃魔法を、その強大な魔力と構成力によってたったの一人で為し得てしまうのだから將軍の地位は伊達ではない。

「いや、こちらこそすまない。かなり帰還の挨拶が遅れてしまった」  
「気になさらないで下さい。帰って来られたばかりで大変でしたでしょう？」

「いや、そんなことは理由にならん」

「僕たちはこうして来て下さっただけで、とても嬉しいです」

日向のような笑顔が、その言葉が心の底から真実なのだと告げる。  
「ありがとう」

「いえ、でも僕は軍事会議の時に会い出来たので良かったです  
が、カインは会えなくて寂しがってたんです。会って下さいますか？」

もう一人の彼は、とてもやんちゃな気性であるが、その実酷く寂しがりやな反面を合わせもつ。

「勿論だとも。実はそれが気に掛かっていてな」

「本当は、僕たちの方から伺おうと思つてたんですよ。でも、カインが素直になれなくて…」

「余計なことまでペラペラ話してんじゃねえよ、アベル」

突然、乱暴な口調が会話に割り込んでくる。

よく知る態度に、自然笑みがこぼれる。

「久しぶりだな、カイン。元気にしていたか？」

「アベルが元気なら俺も元気に決まってるだろ、レヴィ」

先程とはがらりと変わったアベルの態度と表情に、レヴァリティカルテは特に驚くことは無かった。

彼らは、一つの肉体に二人の人格を共有しているのだ。

「そうとは限らんだろう。一つの肉体を共有していても、お前たちは“二人”なのだから」

「へっ」

カインは、顔を逸らし目線を合わせようとしなかった。心なしか、頬に赤みが差している。



「なあ、レヴィ。今から暇なんだろう？ 久しぶりに本気でやり合おうぜ」

わくわくとした子ども特有の無邪気さと、戦場での戦いの経験をもつ軍人としての鋭さを感じる表情に、いつもは鳴りを潜める闘志が沸き立つ。

「構わんが、それならば治癒に特化した者に一名くらい待機しておいて貰わんとな」

特別製の闘技場で行うことになるので城には被害はないが、見極めて本気を出すとしても大怪我を負うかもしれない可能性はある。平時ではあっても、将軍が使い物にならない状態になるのはかなり軽率だ。

「なら、俺たちの精霊が適任だろう。デルタ来い！！」

契約を交わした精霊とはいえ、名前のみで召喚術式を構築し、発動させる才気は舌を巻く。

「お呼びですか、マスター」

魔方阵から現れたのは、白銀の毛並みと翼をもつ虎——光の精霊デルタである。

「今から、レヴィと試合すんだよ。怪我したらよろしく」

「了解しました。マスター」

「そうと決まったら、闘技場いくぞ」

闘技場に着いて直ぐに、臨戦態勢に入る。

「手加減はいらねえ。かかってこい！！」

「では、いざ勝負っ」

魔法と剣による、尋常ならざる戦いが幕を開けた。

「だー、つえ！ 何年も引き込もってやがったから、いけると思った

のによ」

今のところ、レヴァリティカルテはカインとアベルに負けた事は一度としてない。

だが、今日の戦いによる彼らの力量は、自身が軍を離れていた間に格段に上がっている。

これまで以上に鍛練に気を引き締めて臨まなければならないと身が引き締まる思いだ。

「お前も腕を上げたな。幾度かひやひやさせられた」

「まじかつ!？」

誉められたことにカインは破顔する。

「ああ」

頭を乱暴に撫でてやる。

照れながらも嫌がる様子はなく、されるがままになっている。

「なあ…。息子、いんだろ? 会いに行ってもいいか?」

恐る恐る許可を求めてくる姿が以前と変わりがなく、微笑ましい気持ちになる。

「遊び相手になってくれると助かる」

私の言葉に、ほっと安堵するのが伝わってくる。

年頃は少し離れてはいるが、きっとこの子達なら良い友となれるだろう。

「でも、俺じゃ恐がらせるよな…。アベルのがいいよな…」

少々、自分の性格が乱暴な部類に入ることとを彼は自覚している。

相手が人間であるという点も、彼が躊躇する理由の一つかもしれない。

「何を言っている。二人共の方がいいに決まっているだろう? 二人のことは初めは少し驚くかもしれないが、大丈夫だ。事前に話しておく」

「…何か好きなものとかないの?」

小さな声で、持参する土産の好みを聞いてくる様は可愛らしかつ

た。

將軍を務め、部下を統率しているとはいえ、まだ魔族としては子どもであるのだから。

「甘い物が好きだよ」

「そっか、分かった。暇になったら行ってやるよ」

ぶっきらぼうに答えている間にも、何を持っていいかわか、何をして遊ぼうか考えているのだろう。

「本当にありがとう」

直ぐに、ラスの友達は二人増えそうだ。

一人で二人、二人で一人（後書き）

レヴアリティカルテが、可哀想じゃない…。

## 名前って大切（前書き）

一度余りに下らなさをざると、没にした話になります。やっぱり、のせちゃいます。

## 名前って大切

時は、数年前に遡る。

最初の頃は、慣れない育児に戸惑と失敗だらけだった元將軍閣下も、最近では大分育児が板についてきた。

赤子に自分で調理した離乳食を食べさせている姿など、少し前まで名を馳せた猛将だったとは思えない。

ラスが一歳を迎える頃、ラスは喃語から幼児言葉を喋り出すことが出来てきた。

無謀な元將軍閣下は、その様子を誰よりも近くにいて思った。

――自分の名前を呼んで欲しい！

と、子を育てる者ならば当然至る考えだが、如何せん突っ走った彼はただの阿呆に成り下がった。

「ラス、私の名前はレヴァリティカルテだ。さあ、言ってご覧？」  
「あう？」

赤子にそんな長ったらしく、発音しにくい名前が最初から言えるわけがない。少し考えれば分かることだというのに、彼は諦めなかった。

「レヴァリティカルテ」  
「れ、れば？」

「違う、違うぞ。レヴァリティカルテ」  
まだ、諦めない。幼いラスはそれでも大切な存在のために頑張り、一つの結果を出す。

自信を込めて、彼を呼んだ。

「ればー！ればー！」

「待て、待て！？肝臓じゃないぞ、私は！」

強めに否定したレヴァリティカルテに、ラスは驚き泣き出してしまふ。

こうなってしまうば、“煉獄の將軍”も形無しである。

「わ、悪かった。何も怒ってなどいないぞ。泣き止んでくれ」

「ひつく、ひつく」

優しくラスを抱き上げ、あの手この手で慰めにかかった。

こうして、元黒軍將軍閣下は暫くの間、最愛の愛し子に「ればー」と呼ばれ続けることになる。

余談。

「よっ、肝臓將軍」

「へ、陛下！？何故それをつ！」

魔王陛下は何でも知っている。

## 願い事（前書き）

七夕なので更新してみたんですが、こちらの話なら無茶も許されるかと思ひまして…。



## 願い事

「はい、注目。今日は何でもとある世界の、とある地域で“七夕”と呼ばれる日らしい。ある時、働き者の女と男が夫婦になったら、日がな一日いちゃいちゃするだけで仕事を怠け始めたとき。んで、それに怒った娘の超偉い親父が二人を引き離して、でも可哀想だから一年に一回だけ逢えるようになったとかならなかったとかという伝説に由来した祭りらしい」

突然、巨大な植物の木を片手で担いだ魔王陛下が城の食堂に現れ、とある世界の、とある地域の伝説を話し始めるのを、一同は『またか』と思いながら静かに聞くことにした。

「何でか、これ（笹）に飾り付けして、紙に願い事書いて吊るしとくと願い事が叶う、らしい。そこでだ、面白そうだから今からやる。」

こうなってしまうえば、彼らに拒否権は存在しない。魔王陛下こそが、魔族の法そのものであるからだ。

「それをするのは良いかと存じますが、その植物は一体全体何処から持って来られたのですか？見たこともない植物ですが？」

皆を代表して、レヴァリティカルテが魔王陛下に賛同と疑問を投げ掛ける。

「ちよつくら世界越えて、伐採してきた。」

「ーそれって、時空転移じゃ…。」

ただの空間転移ならば、力のある者であれば可能だが、異なる世界に転移するのは次元が違いすぎる荒業である。

それを、恐らく軽々とやってのける魔王陛下はやはり至高の存在なのだと言が再認した。

こうして、“第一回七夕祭り”が開催される運びとなった。

「楽しいねえ」

「楽しいねっ！僕はもうお願い事決まってるんだ」

「私もだよ」

「俺たちも決まってる。やっぱ打倒レヴィだろっ」

ほのぼのと、にこにことお子様組はこの祭りの準備を楽しんでいた。

その横で大人たち、というか一部の將軍は己の道を通り走っていた。

「何て美しくありませんの。確か、国宝に大粒のダイヤモンドがあったのではなくって？あれを飾りに使いましょう！」

「じゃあ、ボクは色とりどりの花火を用意するよ。一杯付けたらキレイだよ」

困った將軍たちを諫められるのは、ここには黒軍將軍閣下だけだ。

「止めんか、貴殿ら！！国宝を何だと思ってる！それに花火なんぞしたら、燃えるだろう！後、ダイヤモンドも燃える性質があるのだぞ！！国宝を燃やす気か！？」

「美に犠牲は付き物でしてよ、犬畜生」

「いいじゃん、全部燃えたらキレイだって」

「貴殿ら……」

駄目駄目な大人たちに翻弄されるレヴァリティカルテは、何とか己を犠牲にしても、子どもたちの夢を死守した。

「いいねえ。祭りつてのは」

少し離れたバルコニーから出来上がった笹飾りを見ながら、魔王陛下はワインを口に使っていた。

「陛下は、願い事をされぬのですかな？」

老獪な執事長が魔王陛下に問う。

「持つて来といて何だが、俺もお前も本当に叶えたかった願いは、今の俺の力を持つてしても叶うことはない」

彼が魔王となる前から共にあった執事長には、彼の心中を誰よりも把握しているかもしれない。

「ですが、願いというのはまた新たに生まれいづるものでしょう」

「その時は自力で叶えるさ。己の手で、最上級の幸福って奴を掴んでみせよう」

「貴方という方は、そういう方でしたな」

深紅の瞳に灯る炎に、かつてとは違う感情を感じた執事長は喜びに皺を深めた。

〈願い事一覧〉

『レヴィとずっと一緒にいられますように』

『打倒！レヴィ！！』

『皆がボクの実験台になってくれますように』

『陛下が阿呆なことで、無駄な労力を割かせないで頂きたく存じます』

『男など消えておしまい』

『閣下の美しく愛らしいお姿が永遠に保たれますよう』

『有給欲しい。』

『無病息災』

『ずっと、ずっと皆と一緒にいられますように』

## 願い事（後書き）

願い事一覧、分かってくださる方いらっしゃるのかと不安になります。

分かりやすくはしてあるんですが…。

書いてない人がいたら、追加します。ひっそりと。

ラスとカインとアベルと……。 (前書き)

今回は、ほぼ会話文のみとなっております。  
また、読み返して分かりづらいようなら書き直します。

ラスとカインとアベルと…。

ラスとカインのある日。

「最近、レヴィに稽古つけて貰ってるんだって?」

「うん! 休憩時間に父上が教えてくれるんだよ。後の時間は、皆の鍛錬を見学してる!」

「そうか、そうか。やっぱり男は強くなっちゃなっ」

「僕、将来は父上みたいに強くて、格好良くなりたい」

「よく言った、ラス!! でも、理想はもっと高くもて!」

「そう、打倒レヴィだっ!! レヴィだって、その方が喜ぶはずだ」

「僕、頑張るっ!」

「よし、そうと決まったら鍛錬あるのみっ! ラスがかかってこいっ!」

「うん!」

こうして、暑苦しいテンションによる、微笑ましい鍛錬が始まった。

ラスとアベルのある日。

「はー、天気がいいねえ」

「ふへー、ぽかぽかだねえ」

「そう言えば、アベル。お仕事大丈夫なの? 將軍って、大変なお仕事だって聞いたよ。本当に父上忙しそうだし」

「大丈夫だよ、ラス。僕たちの副官は優秀で、更に約束したことは

絶対に守る人だからね」

「副官の人がお仕事してくれてるの？」

「彼はね、明らかに年下の僕たちの下にあることが気に入らないんだ。悲しいことに。だから、事ある毎に僕たちに勝負を挑んで来るんだよ」

「ふん、ふん」

「だからね？付き合っただけでいる時間分、勝負に負けたのなら僕たちの有益になるように、ちょっとくらいお仕事を手伝って貰っても罰は当たらないと思わない？」

「うーん、確かに」

「今日は、僕にチェスで大敗したからお仕事を変わって貰ったんだよ。昨日は、カインに模擬戦で完膚なきまでに負けてたなあ」

「へー」

「身の程を知って感じだよな。ああでも、ああいう人がいてくれるから世界は上手く回ってるんだと思うよ」

「あつ、今の話はレヴィ將軍には内緒だよ」

「はい！」

こうして、ちょっとどじで、ぽやんとした笑顔をもつアベルのもう一つの顔を、レヴァリティカルテは知らない。

変人ばかりの環境が、ラスの人格形成にどう影響するのか計り知れない。

ラスとカインとアベルと……。 (後書き)

これを書いていたら、副官を早く書きたくなってきました。名前決めてあげなきゃ。

読んで下さる方、ありがとうございます！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2002u/>

---

（元）将軍閣下の日常

2011年7月10日03時49分発行